

## 論文要旨

氏名 \_\_\_\_\_ 後藤 隆昭 \_\_\_\_\_

論文題目 (外国語の場合は、和訳を併記すること。)

\_\_\_\_\_ 英文記事ライティングのジャンル分析と教育的応用に関する研究 \_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_ -「見聞録コーパス」に基づく言語学的分析を中心に- \_\_\_\_\_

論文要旨 (別様に記載すること)

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。
3. 「論文要旨」は、フロッピーディスク (1枚) を併せて提出すること。  
(氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。)

## 論文要旨

本論はジャンル分析という方法論を用いて、英文記事ライティングを分析し、大学英語教育における英文ライティングとして教育的に応用することを研究したものである。

近年、学術論文や、専門領域において、英文ライティングのためのジャンルに基づく教育が行われている。そこではジャンル特有のコミュニケーション法を明らかにするため、ジャンル分析という方法論が取り入れられており、カリキュラム開発や指導法の改善など、教育的応用が為されている。ジャンル分析とは、特定の言語使用を明らかにするディスコース分析から派生したもので、どのように個人が特定のコミュニケーション状況に参加するため言語を使用するかを見ることで、言語教育にその知識を応用するものである (Hyland, 2004, p. 195)。しかしながら、英文記事をジャンル分析し英文ライティングとして大学英語教育において応用する研究はほとんど見られない。この研究の目的は、ニーズ分析や事例研究に基づく調査から英文記事ジャンルを選定し、その言語学的、構造的、修辞学的特徴をジャンル分析やコーパスに基づく分析により明らかにし、それを大学英語教育において応用することを論じるものである。なお、本論で扱う英文記事ライティングとは、主として新聞の英文記事を書くことを指すものとする。

Bhatia (1993) は、ジャンルに基づく言語カリキュラムにおいて、以下のように新聞記事の有効性を説いている。新聞は簡単に入手でき、幅広いジャンルを網羅し、言語のレパートリーを豊かにできる。一般読者にアピールするように書かれ、概して標準的な言語使用が見られ、新鮮で時事的である。もっとも、新聞のジャンルを扱う場合、ジャンルで目的や英語の特徴も異なることから、学習者の動機づけのために適切なジャンルの選択が必要となる。

また、国策としても文部科学省は、平成 14 年に『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想、平成 15 年に『英語が使える日本人』の育成のための行動計画を発表している。その中で「英語を用いて世界へ情報発信するなど、国際交流を一層活発にすること」が目標となり、英語発信能力の向上が求められている。

以上から、ニーズ分析及び事例研究から選定した英文記事をジャンル分析し、分析結果に基づき英語発信能力を養成する英文記事ライティングのシラバスを提案することは、日本の英語教育や社会状況の方向性と軌を一にするもので、大学英語教育にも大きく貢献できる可能性がある。以降は、本論の構成に基づき内容をまとめたものである。

第 1 章は、英文記事ライティングを経験済みの大学生と未経験の大学生、及び、英文記事ライティングを実践する教師を対象にした質問票調査による英文記事ライティングのニーズ分析である。

前半の大学生に対する質問票調査では、次のことが明らかになった。英文ライティングの種類では「手紙」「日記」「E メール」「新聞・雑誌記事」などが好まれる。学生の約 60%が英文記事ライティングをすることに関心を示し、「ストレート・ニュース」「特

集記事」「エッセイ」「体験記」「旅行記」などが人気で、読者には「世界中の人」が多く選ばれている。英文記事ライティングでは、客観的に書くことなど、特有の表現方法に加え、「専門用語」が難しいとの回答も目立ったが、経験済みの学生にはそうした回答は見られなかった。以上から、読者を世界中の人や外国人にするなど、リアルなコミュニケーションにすることが望まれる。英作文の経験がないという回答から、書くテーマを身近な出来事にして書きやすくしたり、基本的な英語の指導も求められる。英文記事ライティングでは、基礎的な英語に加えて、ジャンル特有の表現や書き方も教える必要がある。実践例のない大学では、専門用語があって難しそうとのイメージが認められたが、既に取り組んでいる大学では、そうした回答は見られないことから、大学英語教育においても十分に取り組み可能である。

後半の教師に対する質問票調査では、次のことが明らかになった。キャンパス英字新聞作成など、自ら取材し、特集記事やインタビュー記事を書くなど実践的な取り組みも見られる。ジャンルとしては、ストレート・ニュース（日々の出来事や事件の報道）や特集記事、インタビュー記事が中心である。英語発信力の向上、情報を整理して伝える能力、英語表現力の養成が、授業の利点として挙げられている。参加者は総じて英語力は高いものの、個人差や専攻に応じて英語力に差が見られる。時事的なことを扱い、ものづくり的な要素があることが、楽しんで取り組める要因でもある。教師によっては、社会、統計、国際などジャンルの違いを意識して指導が行われ、モデルの英文記事を読むことが奨励されている。教師の抱える問題には、受講者数の調整、英語力の個人差、教材の難易度、ニュースの基本の教え方などがある。援助には「文型ソフトウェア」「見本となる英文の多読」「日本語の分かる英字メディア経験者による指導」「書いて添削の繰り返し」などが求められている。以上より、教育的示唆として、モデルの英文記事の多読や、書いては添削の繰り返しが挙げられる。教師自身も英文記事ライティングを熟知しておく必要があり、ニュースというジャンルを意識しての指導が求められる。専攻や個人間での英語力の差や指導可能人数も考慮する。授業の利点として、ビジネスなど幅広く社会の中で通用する英語力を養成でき、表現力や文法、情報の整理や伝え方なども学べる。ものづくりや現代的な話題により学生の関心を高められる可能性がある。

第2章では、大学英語教育において英文記事ライティングの実践事例（「英字新聞づくり」「出版英語」「地域丸ごと翻訳力」「Decoding Kyoto Project」）が見られることから、目的や内容を分析し、大学英語教育における英文記事ライティングの方向性を明らかにしている。結果、教科横断的であること、ワークショップ、ものづくり的であること、多様な目的と付加価値への期待があること、地域性や姉妹校（都市）の活用、特集記事（読みもの）中心であること、資料だけでなくインタビューなどの利用、従来の指導（添削、教師面談、ネイティブ・チェック等）に加えてジャンルに基づく指導、コンピュータ・テクノロジーの利用が見られることなどの特徴が分かった。

第3章では、ジャンル分析について論じられる。初めにジャンル分析における言語学

的、社会学的、心理学的な学問的背景が明らかにされる。次に選択体系機能言語学 (以下、SFL と略す) や特定目的の英語 (以下、ESP と略す)、New Rhetoric などのジャンル流派を概観し、本論で扱うジャンルの定義「ジャンルとはテキストの分類のことで、書き手の反復的状况における特徴的な言語使用を表すものであり、特定の目的のため、特定のオーディエンスを対象として、特定のコンテキストで使用されるものである」が述べられる。また多様なジャンル分析のアプローチ (Swales, 1990; Bhatia, 1993; Hyland, 2004; Noguchi, 2004; Partridge, 2000) が存在することから、各アプローチを比較考察する。結果、総合すると、テキストの言語だけでなく、ジャンルの目的、読者、書き手と読み手の関係、下位ジャンル、歴史、慣習性、ガイドブック、専門家へのインタビュー、コーパスなど、ジャンルを取り巻くありとあらゆる資源を総動員し、ジャンルを捉えることができるようになった。これらを踏まえ、本論のジャンル分析の指針も提示する。第 1 に、英文記事のジャンル分類を明らかにする。第 2 に、教科書や手引書等も利用し、第 6 章に関わる特集記事の特徴を明らかにし、実際の分析に繋げる。第 3 に、英文記事ライティングのジャンル分析における先行研究を概観し、実際の分析の示唆とする。第 4 に、ジャンルテキストを電子化し、単語頻度分析、特徴語分析、N-grams 分析、共起語分析など、コーパスに基づいた分析をする。第 5 に、学習者の状況文脈を把握するため、大学生と教師に対し質問票によるニーズ分析や、英文記事ライティングの実践事例を調査する。これについては第 1、2 章で既に行われている。

第 4 章では、英文記事ジャンルについて、分類法と言語的特徴を明らかにする。大局的にはハード・ニュースとソフト・ニュースという分類があり、例としてニュース・ストーリーと特集記事が挙げられ、ジャンルとして扱われる。本論で関係する特集記事をニュース・ストーリーと比較し、単なる要約ではない多様なリードが用いられること、重要な事項から先に述べる逆ピラミッド構造が稀であることなどが分かった。ここでは、第 6 章で分析する「見聞録」が、即時性や緊急性を要する「ニュース・ストーリー」ではなく、書き手の見解が入り、人・場所・物事を描写するため「特集記事」に該当し、「見聞録」を特集記事ジャンルの下位ジャンルと位置づける。また、第 6 章で分析を行うため、本章の特集記事の特徴を下位ジャンルである「見聞録」の分析項目として次のように考慮する。第 1 にリードの種類やそこでの強調表現が挙げられる。第 2 に、トピックの種類を分析する。第 3 に、テキストの構造を、導入、本文 (展開)、結末の区分を利用し、コーパスによる特徴語分析を行う。第 4 に、書き手の態度・評価の現われから、助動詞に焦点を当てるモダリティ分析と、「I」と共起する動詞の分析をする。

第 5 章では、英文記事のジャンル分析に関する先行研究 (Bhatia, 1993; Bhatia, 2004; Flowerdew, 1993; Nishina, 2007; So, 2005) を概観し、分析の焦点や分析方法を明らかにしている。結果として、ジャンル分析の焦点は、ミクロ的には、専門用語や数字などの語彙、時制などの文法、冠詞などの品詞、語彙的意味、動詞文体、名詞化、カラー、誇張表現などで、一方、マクロ的には、ディスコース構造のパターン、情報の提示順などで

ある。方法論としては、コーパスを構築し、頻度語、N-grams、特徴語分析などコーパスに基づく方法や、Field (活動領域)、Tenor (役割関係)、Mode (伝達様式) など SFL の分析法が見られた。これらを踏まえ、第 6 章に、単語頻度分析、特徴語分析、N-grams 分析、共起語分析などコーパスに基づく分析を追加している。

第 6 章では、これまでのニーズ分析と事例研究より、一つの選択肢として、ものづくり的要素を取り入れ、身近な地域を活用し、学生の英語能力や英語表現能力を高め、異文化理解を促し、地域社会に貢献できるものとして、外国人読者を対象に地域をテーマとして特集記事を作成し、英文雑誌を発行する英文記事ライティングのプログラムを設定する。そうした英文ライティングのモデルとなる英文記事ジャンルの一つとして、日本に在住する外国人ジャーナリストが、身近な地域の物事や出来事を見たり聞いたりしたことを報告する「見聞録」を利用し、「見聞録」を「特集記事」の下位ジャンルに位置づけ、「見聞録コーパス」を編纂し、主にコーパスに基づく分析を行う。ジャンルテキストには「かながわ見聞録 (約 2 万語)」と「ETIENNE'S COOL JAPAN (約 4 千語)」を選んだ。「かながわ見聞録」は、朝日新聞の朝刊、神奈川版に、2004 年 4 月から 2009 年 6 月まで計 84 回連載された英文記事で、著者が「かながわ」で見たり聞いたりしたことが書かれている。一方、「ETIENNE'S COOL JAPAN」は英字新聞 The International Herald Tribune / The Asahi Simbun において 2010 年 2 月から 2010 年 5 月まで計 14 回に渡って連載されたもので、東京を中心とした生活文化のなかで、雛人形、自動販売機、携帯灰皿など「モノ」に焦点が多く当てられている。両者とも比較的小規模のコーパスになるが、学習者の現実世界や社会的文化環境に関する身近な話題を扱い、各記事の平均語数も約 300 語前後で、長い英文記事に書き慣れていない学習者には適度な長さでありモデルになりうるものである。

実際の分析では、主としてコーパス分析ソフトを用い (Anthony, 2004: v 3. 2. 1)、単語頻度分析、特徴語分析、N-grams 分析、テキスト位置分析、リード分析、モダリティ分析、過程型分析など多様なアプローチを採用し、以下のことが明らかになった。

「かながわ見聞録」と「ETIENNE'S COOL JAPAN」の両者とも、第一人称の「I」で語り進め、自らが「見たり」「聞いたり」「感じたり」「気付いたり」することを報告し、書き手の異国性も比較文化的な視点として語句・表現に現れている。リードの種類は、主に 3 種類のリード、即ち、第一人称で体験を語る「Narrative」、情景・出来事を描写する「Descriptive」、書き手の態度・評価を表明する「Statement」が使用されている。見聞録は、見たり、聞いたりしたことに基づき書かれるため、「Narrative」「Descriptive」が多く用いられ、見聞したことについて書き手の意見が表明されるため「Statement」が使用されると考えられる。「かながわ見聞録」では、その他にも少数ながら「Blind lead」「Direct address lead」「Roundup lead」「Quote」など多様なリードが使用され、読者の関心を引き付ける様々な工夫が見られる。他にもリードの特徴として、「かながわ見聞録」では第二人称、最初と最後を示す語 (first, last)、強意の否定語 (never)、驚きを表す語

(surprised) などが用いられ、一方「ETIENNE'S COOL JAPAN」では最上級の使用が見られ、両者の共通事項として、事実性を強調するため数字が用いられている。このように、記事の導入部であるリードは読者の注意を引くため強調する書き方が為されている。N-grams 分析ではコーパス量の関係で「かながわ見聞録」のみ対象としたが、時間表現が多く、その他に、場所表現、知覚・認識表現、理由表現、伝聞表現など、ある種の定型表現が使用されていることが明らかになった。時間、場所、理由の定型表現は、それぞれ「when」「where」「why」に相当し、5W1H を重視する記事の一般的特徴と一致している。知覚・認識表現、伝聞表現も見聞録的要素を構成する。テキスト位置分析、モダリティ分析、過程型分析では、テキストを導入部、展開部、結末部に3区分して分析を行った。結果、各部分において主に「設定」「展開」「評価」という役割があると考えられる。導入部では、時間・場所の設定、知覚 (特に「視覚」「聴覚」)・認識動詞 (特に「気付き」)、第一人称、書き手の移動・行動など「動き」を表す動詞、書き手の外国性の表れなどの特徴が見られる。展開部では、他の部分と比較し、「and」、「however」、「but」などの繋ぎ言葉や接続表現が特徴的であり、「ask」など文を発展させるため他者性の取り込みも確認できる。結末部では、助動詞 (特に will や would)、仮定・条件を示す語、知覚・認識動詞 (特に think) などが用いられ、書き手の態度・評価が示されている。見聞録コーパスでは知覚・認識動詞が全般に渡って分布し、「見たり」「聞いたり」「感じたり」「気付いたり」する見聞録的な要素が特徴となっている。

ジャンルの観点からは、第4章の英文記事ジャンルで論じたことを踏まえ、見聞録はニュース・ストーリーに見られる緊急性や即時性はなく、特集記事ジャンルであると改めて位置づけられる。内容も、人・場所・物事を描写し、書き手の態度や評価が見られるなど比較的自由的な書き方のため、ニュース・ストーリーとは相違する。リード分析からも、見聞録では主に3種類のリード「Narrative」「Descriptive」「Statement」が使用され、「Summary lead」を主とするニュース・ストーリーのリードとは異なる。他にも「Blind lead」「Direct address lead」「Roundup lead」「Quote」など多様なリードで読者を引き付ける特集記事の特徴が見られる。また、見聞録の近接ジャンルとしては旅行記事が考えられるが、これは旅行者としての書き手が旅行地をアピールするために書くことが想定されるもので、第5章の先行研究で示されたように、肯定的な形容詞の列挙、販売促進的な表現が見られ、書き手が現地で見たり聞いたりしたことを報告する見聞録とはコミュニケーションの目的が異なっていると考えられる。従って、形容詞の使用について、先行研究の旅行記事では、魅力的な描写で、魅惑的、詩的な表現が認められるが、見聞録では主に結末部で書き手の態度・評価を示す一般的な形容詞が使用され、他にも「would」により書き手の態度・評価が婉曲的に表現される。更に、旅行記事ではネガティブな表現は回避されると指摘されているが、例えば「かながわ見聞録」では「demolished」「polluted」「annoyed」など肯定的でない表現も用いられる。このように見聞録は先行研究例の旅行記事とは異なり、その相違は、前者が読者に現地で見たり聞

いたりしたことを書くのに対し、後者は読者に旅行地をアピールするために書くというコミュニケーションの目的によるものであると考えられる。

ジャンル分析の観点からは、以下のことが指摘できる。第1に、ジャンル分析でよく見られる Swales (1990) の Move 分析は適用が難しいものもある。その場合も、一般的なテキスト構造である、導入部、展開部、結末部の3区分を利用し分析することで、各部分の役割や特徴語を明らかにできる。第2に単語頻度分析及び特徴語分析はテキストの全体的な概要を示すが、詳しいジャンルの特徴の把握には、更なる分析を要する。第3に、コーパスに基づく分析は有用であるが、その他の分析でコーパス分析を補強できる。第4に、対象ジャンルにおけるジャンル分析の先行研究、教科書、手引書なども、分析項目を設定するのに役に立つ。それらが少ない場合も、上位ジャンルや類似ジャンルの利用も考慮できる。第5に、ジャンル分析は言語教育として学習者の状況文脈を考える必要がある。第6に、ESP 及び SFL の両方とも折衷的に分析に取り入れることも考慮できる。

教育的示唆の観点からは、本論のジャンル分析で得られた分析結果は、学習者の実際のライティングの際にも有用なものとなりうる。外国人を読者として設定する場合には、比較文化的な視点を入れ、書き手が日本人であることを活かしライティングを行うことができる。加えて、地域や身近なものをテーマに書くことで、学習者に取り組みやすいものにできる。定型表現は、そのまま使用したり、一部を借用するなど、ライティングの際に利用できる。テキスト構成においては、導入部、展開部、結末部と意識し、各役割を考えながら、語句や表現を選択する。特に導入部であるリードは、事前に種類や強調表現など、読者を引き付ける特徴が分かれば書く際の手助けとなりうる。また、視覚・聴覚などの感覚や、発見や気づきを活かすこともできる。実際の指導では、ジャンルテキストをモデルとして使用し、グループで話し合い、学習者に言語的特徴を発見させたり、リーディングの際に特徴的な部分を見つけ出させて、別の語句や表現と入れ替えて効果を確かめさせるなどの活動も考えられる。

第7章では、大学英語教育における英文記事ライティングの教育的応用例として、Vygotzky (1962) の「発達の最近接領域」の理論を組み込む Teaching and Learning Cycle (Feez, 1998) を用い、ESP の genre awareness (ジャンル意識) や audience awareness (読者意識) を取り入れ、ジャンル分析の結果や試行に基づき、一例として地域をテーマに英文記事を書くシラバスを提案した。

終章では、研究全体が概観される。本論の特徴として、大学英語教育において英文記事ライティングをジャンル分析し英文ライティングとして応用する試みはほとんど見られないため、本研究は従来のジャンル分析の研究領域において新しい可能性を拓くものであること、これまで見過ごされていた「見聞録」をジャンルと位置づけ英文ライティングのシラバスに活用したこと、教育的にも、学生の英語発信能力の養成、異文化理解に繋がると同時に、地域社会にも貢献する可能性があることを挙げ結論としている。